地域情報（県別）

【東京】日本の救急医療の課題「準夜帯」に対応するクリニック-嘉村洋志、瀬田宏哉・ロコクリニック中目黒共同代表に聞く◆Vol.1

2020年6月5日 (金)配信 m3.com地域版

祝日などを除いて休診日を設けず、平日は午後11時まで、土曜日と日曜日も診療する珍しいクリニックがある。「ロコクリニック中目黒」がこんな体制を取っているのは、共に救急科専門医である、共同代表の医師・嘉村洋志氏と瀬田宏哉氏の思いからだ。2人は勤務医時代の同僚であり、日本の救急医療に課題を感じてきたという。両医師が持つ問題意識や、社会的課題の軽減に向けた対策について聞いた。（2020年4月22日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

――まずは、ロコクリニック中目黒の概要についてお聞かせください。

嘉村　当院は2018年に開院したクリニックで、内科と外科、小児科、心療内科を標榜しています。特徴だと思うのは、「次世代の赤ひげ」をテーマにどんな患者さんも断らずにまずはお話を聞くようにしていること、祝日などを除いて休診日を設けずに夜遅くまで診療していることです。具体的には平日は午後11時まで、土曜日と日曜日は午後2時まで診療しています。

基本的には救急科専門医である私と瀬田医師が常駐していて、あとは小児科専門医と総合内科専門医の資格をそれぞれ持つ2人の女性医師が週に1日ほど診療してくれています。

外来と併せて在宅医療も行っていて、中でも訪問看護には力を入れています。常勤の看護師3人が自ら関係職種の人たちに足を運んで人的ネットワークの構築に取り組んでいて、2019年4月には訪問看護ステーションも開設しました。

嘉村洋志氏（右）と瀬田宏哉氏

――都心にあるクリニックなので、やはり若い患者が多いのでしょうか。

瀬田　そうですね。中目黒という土地柄、働いている方や子育てをしているお母さん方の来院が多く、ご高齢の方は1割程度です。新型コロナウイルス感染症が本格化するまでの患者数は平日50～80人ほどで、冬の感冒流行期は100人前後で推移していました。このうち6割が20～40代の方々で、3割がお子さんです。在宅では10人ほどを診ています。

――夜11時まで診療するクリニックは珍しいと思います。なぜこのような体制にしようと？

嘉村　背景には、私たちのキャリアに由来する共通の問題意識があります。私と瀬田医師が出会ったのは2012年、東京ベイ・浦安市川医療センター（以下、東京ベイ）が開設したときで、以来、私たちは共に東京ベイの救急科で働きました。やがて互いの人間性に魅かれ合い、「共同代表」として開業したわけですが、2人とも勤務医時代から日本の救急医療には問題があると感じていました。

瀬田　いわゆる患者さんの「たらい回し」は当時、日常的に起きていたことだったんですね。どんな医師でも診られそうな軽症にも関わらず、5件から20件ほど受け入れを断られ、通報から1時間ほどかかってやっと東京ベイにたどり着く患者さんも少なくありませんでした。東京ベイはどんな患者さんでも断らない方針を掲げていましたから、患者さんを断ってきた病院の姿が見えやすかったのです。

――それで、開業医として夜間診療を行うことで救急医療の負担を減らそうと？

嘉村　はい。私たちが注目したのが、準夜帯での診療です。「救急」というと12時を過ぎた深夜の搬送が多いイメージを持つ人がいるかもしれませんが、実は最も混むのは、午後5時から11時までの準夜帯。

その一方、救急搬送される患者さんの中には高度な設備や病床がなくても診られる方、つまりクリニックで十分に対応できる方が少なくないので、午後11時まで診療することで大病院の負担を減らせるのではないかと。多くのクリニックは夕方に閉まるところが多いわけですから、地域の患者さんの利便性も高くなります。日本の医療を全体的に見たとき、医療者側と患者側の双方にとってメリットがあるだろうと考えました。

瀬田　そんな中で中目黒に開業したのはなぜか一言でいうと、バランスの良さです。若い人や子育て層が多く、また当院がある駅の近くは飲食やアパレルなどの各種店舗から大小の企業まで立ち並んでいるため昼間人口も多い。一方の周辺には昔から住んでいるご高齢の方が少なくありませんから、在宅医療のニーズも高いのです。

夜間診療においても、仕事帰りの会社員やお子さんの急変に気付いたお母さんなどが来院してくれているため、昼間より患者さんが多いこともあります。地域のニーズに応えられているのではないでしょうか。

――「次世代の赤ひげ」。キャッチーなテーマだと思うのですが、なぜこれを掲げたのでしょう。

嘉村　医療の原点回帰を図りながら、時代に応じた先進性も取り入れていきたい思いからです。私の祖父は地方の開業医だったのですが、どんな患者さんでも拒まずに診て、夜も診療し、また往診にも出かけていました。そして何といっても患者さんとの距離が近かった。患者さんが自分の畑でとれた野菜を診療所に持って来てくれるような、そんな関係性でした。

瀬田　現在の医療は専門分化が進み、また、特に都会は医師と患者さんとの関係がドライなものになりがちではないでしょうか。そんな中で私たちは嘉村医師が話したようなひと昔前の「いつでも、どこでも、どんな悩みでも」応えようとした開業医の姿を目指しているのです。「医師」というかっちりした印象よりは、「親しみやすい町のお兄さん」になりたいと思っているんですね。

◆嘉村 洋志（かむら・ひろし）氏

2005年、長崎大学医学部卒。日本医科大学付属病院高度救命救急センターや武蔵野赤十字病院救命救急センター、東京ベイ・浦安市川医療センターなどを経て、2018年に東京ベイの同僚だった瀬田医師と開業。日本救急医学会専門医など。

◆瀬田 宏哉（せた・ひろや）氏

2008年、東海大学医学部卒。国立病院機構東京医療センター脳神経外科や東京ベイ・浦安市川医療センターを経て、2018年に東京ベイの同僚だった嘉村医師と開業。日本救急医学会専門医。日本プライマリケア・連合学会認定医・指導医など。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部 勇太】

記事検索　ニュース・医療維新を検索